

東南アジアは今、形成(それとも解体) されつつあるのか？

高 谷 好 一

まず、今日の三つの報告に対する感想から述べておきたい。斎藤さんのお話は非常に好感を持って、全てに同感だと頷きながら聞いてたが、最後の結論に付いては異論を唱えたい。「近代化が押し寄せたのではない。むしろ近代化の中で東南アジアなるものが形成された」と述べられたが、これには異論を唱えたい。もしそれまでに東南アジアには何も無かったというならば私は反対で、その前にも「東南アジアはあった」と主張したい。坪内さんの質問に対して、「近代化が出る前に、東南アジアには商業ネットワークがあった。それを単に伝統と考えていいのか」と答えられている。そこは十分に議論する必要があるだろう。東南アジアが空だったのか、ちゃんとしたルールを持っていたのか。歴史学者であれば、マレー世界の評価に関わる議論と考えていいだろう。

古田さんの話で歴史についての理解を深めることができた。一つの民族集団が普遍国家になり、そこからまた地域国家になっていく。一番最初にあったベトナムは、中華世界の周辺に夷狄と言われながら、小中華を作ろうと懸命であった国だった。それが最終的には東南アジアの中にある一つの地域国家に変わってゆく。ベトナム史を面白く理解させて頂いた。ただ、古田さんは強烈なベトナム中心主義だという印象を受けた。北ベトナムがあり、後ろには中国という巨大な存在がある。だが、それ以外は何もないかのような話だった。南ベトナムも完全に無視されていた。私がとりわけ北ベトナム中心主義だと感じたのは、松岡さんのコメントで17度線の問題が出たのに対して、それをあまり取り上げられなかったのを見て、そう強く感じた。ハノイが中国に対して反発していたことは力説された。それと同じようにサイゴンがハノイに対して反発していたという事実もあったのである。その意味では17度線は重要だ。古田さんはサイゴンを平気で取り込んだ北ベトナムを淡々と語っていかれた。これは調子が良いすぎはしないか。ASEANの仲間の南ベトナムと、小中華で威張っている北ベトナムは、全く違う二つの世界だと思う。「世界単位」で言えば、ベトナムは二つにしなければならないだろう。インドネシアをジャワとボルネオで二つに分けて考えたいのと同じように、生態学者が見れば17度線は大きな意味があると指摘しておきたい。

岩崎さんの話も非常に興味深く聞いていた。ASEAN諸国に一貫して流れているものは開発体制民主主義だといわれる。開発を餌に進んできている。非常にいい分析だと思う。ところが、これも最後の結論には大反対なのだ。「欧米が作った大状況を受容し、小状況において自己主張する」というのは違うのではないか。そして開発体制の次には何も無いというのも納得

できない。彼らはもっと考え深いと思う。中国やインドの巨大な人口、それに日本の巨大な経済を見ていれば、地球の調和を考え、環境にマッチした生き方を提示するようになる可能性がある。彼らはそういう人達なのだ。それでもまだ大状況における小さなアジャストしかない人達と言えるだろうか。

総じて感じたことは、文献派と地べた派はずいぶんと違う図を見ているらしいということだ。文献派の分析は合っているが、最後の結論がいつも違ってくる。私のような地べた派からするとそのように見える。

このシンポジウムを指揮された山影さんにも、質問したいことがある。山影さんはASEANを東南アジアの未来像として考えられているのかどうか。ASEAN10をどう考えているのかということについても考えを聞かせて頂きたい。

最後に今回のシンポジウムを通じて、地域研究と国際関係論あるいは社会経済史の違いとして感じるものがあつたので、その事について触れておきたい。。国際関係論の人の話を聞いていると着物の話を聞いている気がする。例えて言えば、花嫁がお色直して着物を次々に着替えて出てくるが、その着物の議論をしておられる印象がある。我々地域研究者は、その嫁さん自体を気にしているのだが、国際関係論の人達は、着物の話ばかりをしている。山影さんが言う「経済・安全・共同体」について考えてみると、経済・安全は着物の話になるのだろう。だが共同体というのは、ひょっとしたら着物ではないのかもしれない。今回のシンポジウムでも共同体というものの実態をもう少し詰めてもらえれば、地域研究との接点が出てきたのかもしれない。

最後に、「東南アジアは形成されつつあるのか、解体されつつあるのか？」という与えられたテーマについて、私なりのイメージを述べておきたい。形成されつつあるのかと言われたら、私はYESと答えたいと思う。しかしそれは、歴史を通じて何度も形成されてきており、いままた、何ラウンド目かの東南アジアの形成があると思っている。その都度極めて似た構造になっているのではないかとも思う。

その構造はなかなか見え難い。通常よく見えるのは、巨大な中華世界と、インド世界である。近代ヨーロッパもある。中華からみれば東南アジアは夷狄になる。その夷狄であり後進国である東南アジアが考えているものが開発というものになるのだろう。だが、ここの所をよく考えて頂かないと困る。まず東南アジアでは国の作り方そのものがそうした大国とは違うのである。また生きていく基本姿勢も違うのである。彼らは大国を作らない。普通は小国を作る。しかも組織の緩い小国を作る。そうした小国が鎖状に繋がって『地域』を作るのである。そういう

『地域』を東南アジアは何度も作ってきたということだ。そして、それはASEANという方向性をもって、今、とりわけ意欲的に作られている。そして、この緩い連合は国際的にも決して突出した姿勢をとらない。中国やインド、ヨーロッパを前面に出し、それを認めている。そういうマージナル性は東南アジアの得意とするところである。マージナルな位置に留まって全体をまとめていく。それが東南アジアの生きる姿勢である。人口爆発、環境破壊と問題になっているこの地球上で、東南アジアはそれをよく知り、しかも後ろにいて世界の国をうまく操作して生かしていく役割を担っているのではないかと考えている。